

「アメリカの原理主義」より

(集英社新書、河野博子著、2006,7,19)

ドメスティック・テロリズム／ドメスティック・テロリスト
クリスチャン・アイデンティティ
宗教右派
マルチカルチュラリズムへの攻撃
アメリカン・エクセプションナリズム（アメリカ例外論）
神への傾斜・浸透する終末論
宗教右派とネオコンの結合
アメリカの原理主義という仮説

ヨーロッパからもアジアからも異質な超大国アメリカはどこに向かおうとしているのか。米国の「保守回帰」の中身をもっとよく見ることは、日本人にとって無意味ではない。

ドメスティック・テロリズム／ドメスティック・テロリスト

2001年にアル・カイダのテロ攻撃を受ける前、「極右」としてくくられる、1990年代の米国を悩ませた自国のテロリストたちがいる。これまで米国の政治や社会の動向を論じる時に、その存在が顧みられることは少なかった。

オクラホマシティーの連邦政府ビル爆破事件の主犯の元陸軍軍曹ティモシー・マクベイの座右の書といわれる本が『ターナーの日記』（約25万部）。約25万部著者のウィリアム・ピアース氏は元物理学の大学教授（1962-65）で、その後極右の思想家に転じ、「アメリカ・ナチ」党の幹部を経て白人優越主義の組織「全国同盟」のリーダーとなった人物（2002年7月没）。

ミリシア（Militia）とは、米国各地で白人男性により自発的に組織され、銃などによる自衛訓練を繰り返すグループのことをいう。辺境の地で共同生活を続けるグループから、都会で時々集会を開き訓練を続けるグループまでいろいろ存在し、どの要素に重きを置くかは異なるが、共通するのは、

- ① 反連邦政府感情（「陰謀理論」と結びついているのが特徴）

- ② 国連主導の新世界秩序への拒否感
- ③ 伝統的な家族のありようや倫理へのこだわり
- ④ 銃規制への強い反対
- ⑤ 反ユダヤ・白人優越主義

ドメスティック・テロリストたちの共通項 = キリスト教倫理の絶対視と国家独立の歴史的起源からくる反連邦政府・自主独立の原則へのこだわり。

クリスチャン・アイデンティティ

クリスチャン・アイデンティティ理論は、水面下で極右を支えるイデオロギーであって、ふだんは社会の表面には決して出てこない。自分はクリスチャン・アイデンティティであると認める人は少ない。

南カリフォルニア大学ステファン・オレアリー准教授によれば、その考え方は以下のように要約される。

「イスラエル王国の滅亡の後、行方がわからなくなった10の部族の子孫が現在のヨーロッパの白人種であり、とりわけ英国の人を指す。つまり英国人は本当のユダヤ人であって、今自分たちをユダヤ人と称する人々は本当のユダヤ人ではない。白人のキリスト教徒こそが神の約束の継承者である」

この考え方は、「ブリティッシュ・イスラエリズム」もしくは「アングロ・イスラエリズム」と呼ばれた古い教義を継承し、「二つの種」論を持つ。「アダムとイブと間にできた子供の子孫は白人のキリスト教徒で本当のユダヤ人、イブが蛇と交わってできた悪魔の子の子孫が自称ユダヤ人」と考えている。従ってその特徴は、白人優越主義と反ユダヤ主義となる。

宗教右派

アクロン大学のジョン・グリーン教授の定義は、「宗教右派とは、1970年代後半から米国政治で目立った動きをするようになった信心深く保守的な人々のことを言う」、「実際には、人々が宗教右派と言う時は、福音派のプロテスタント (Evangelical protestants)を意味する。それは米国の成人人口の約25%を占める」「宗教右派とは、福音派のプロテスタントの政治的活動家といってもいい」

ところで、キリスト教原理主義者という用語は、グリーン教授によれば、「あいまいな使われ方をしている言葉だ。様々なグループを含んでいて、大きな福音派という

くくりの中の一部だ。プロテスタントの信者の中の、一種の宗教活動をしている人たちとも言える」。聖書は信仰と実践の唯一絶対なルールであるだけではなく、科学的、歴史的にも正しいものであり、従って、進化論は真実ではなく聖書にある奇蹟は本当に起きたことで、天国も地獄も存在し、キリストの再臨は確実に起きる、と説く。（ライス大学ウィリアム・マーティン教授『神を味方につけて』）

原理主義者（＝信仰の根本原理を掲げた人々、マーティン教授による）は1910年代に現れ、20年代に進化論教育つぶしで一時勝利しつつも、各宗派・教派内での主導権争いでリベラル・穏健派に敗退していく。しかし、その後、より広い層に受け入れられるキリスト教保守として陣営を組み替え、政治・社会の真ん中への進出を目指した。宗教右派へと衣替えする過程で、人種差別的要素や反ユダヤ主義が薄まったり、逆に「親ユダヤ」的傾向が生まれたりした。

「原理主義的なキリスト教信者は、あまりにもしばしば社会の端っこにいるただの負け犬という扱われ方をしてきた」（マーティン教授）

マルチカルチュラリズムへの攻撃

マルチカルチュラリズム（人種、文化、宗教の多様性こそが米国の強みであると考ええる＝セトンホール大学マキシム・ルリー教授）と呼ばれるこの考え方のルーツは、公民権運動が盛り上がった1960年代にある。2月は「アフリカ系米国人歴史の月」、9月15日から1ヶ月間は「中南米系伝来の（ヒスパニック・ヘリテージ）月」→90年代に全米に浸透。しかし今それへの攻撃が。

アラバマ州教育委員会が定める教育指導要領が2004年4月から改訂。それまであった「マルチカルチュラリズム」のタイトルと「多くの文化が米国を形作っており、米国の強さは市民の多様性にある。人種、性別、言語により異なる見方を理解することで生徒の視野は広がり、国民として結びつきながら、違いを大切にすることができる」との説明文が「カルチュラル・アウェアネス（文化理解）」のタイトルになり、「調和」や「共通性」の大切さを微妙に強調している。

「多様性は誤り」とする元陸軍設計技師ヒュー・マキニッシュさん（アラバマ州教育委員会社会科コース小委員会35人の1人）。

「バルカン半島を見てごらんよ。3つの宗教、5つの異なる言語が入り交じり、多様性の典型といえるから、それこそ平和と安定があるかと思いきや、混乱、戦闘、民族浄化、死と破壊が渦巻いている」「だいたい、建国の父たちは全員が白人、男性、金持ち、プロテスタントと多様性ゼロなのに、独立宣言、米国憲法と重要文書を次々

に生み出した。多様性は成功の前提条件では決してないんだ」

「米国社会の核を形成してきたのがアングロ・プロテスタント文化」（ハーバード大学ハンチントン教授）。「中南米系移民は、米国の中心的な文化に同化せず、独自の政治・言語空間を作り、アングロ・プロテスタントの価値観を否定」（同）、今後「英語とスペイン語の二重言語社会をはじめ多文化主義が進み米国共通の文化が失われていく。その反動として民族主義や排外主義が頭をもたげてくる可能性がある。」（同）

アメリカン・エクセプションナリズム（アメリカ例外論）

「アメリカは特別な国で、神の使命を帯びてその力を使い、世界中の他の地域、幸が少ない人々にアメリカシステムによる繁栄の便益をもたらす責任がある」（イギリス人元外交官ジョナサン・クラーク氏＜CATO 研究所＞）という考え方。

この考え方の起源は、17世紀に英国から新大陸に移民した清教徒たちによる「われわれは特別の精神的及び政治的使命——新世界に教会とすべての国のモデルとなるような社会の建設——を担っている」という認識にさかのぼることができる。

「丘の上の都市（a city upon the hill）」

使命から宗教色を薄めたのがベンジャミン・フランクリン（独立宣言起草者の1人）で、アメリカの使命を、ヨーロッパの政治と社会から腐敗を取り除き、純化した世俗的国家を作ること、と再定義した。（宗教国家ではないアメリカ）

19世紀には「明白な使命（マニフェスト・デスティニー）」というフレーズが広まり、米国の西部開拓や土地買収、武力行使による領土拡張を正当化するロジックとなった。

アフガン空爆に始まる対テロ戦争、対イラク戦争を主導したのはネオコンだが、それを可能にしたのが、エクセプションナリズムの存在であり、またネオコンと宗教右派との「連携」であった、というのがクラーク氏の描く構図である。

ネオコン：米国型民主主義を世界に広め、人権が抑圧されている国や専制国家を民主化する必要性を掲げている。国際機関が中心になる国際条約や国際的なコンセンサスを軽視し、米国の巨大で進んだ軍事力行使に躊躇しない姿勢が特徴。伝統的保守主義に見られた非干渉主義とは大きく異なる積極的な対外政策を主張し、軍需産業や保守系ユダヤ人とのつながりが深い。

神への傾斜・浸透する終末論

通称「レフト・ビハインド」シリーズ、全12冊（ティム・ラヘイ、ジェリー・ジエンキンズ共著）。計6500万部以上販売。

新約聖書の「ヨハネの黙示録」に沿ってキリストが再臨し、ハルマゲドンの戦い（終末の戦い）を経て千年王国に入るまでの7年間をスリラータッチで描く。

<1冊目『レフト・ビハインド』>信心深い人が忽然と消える。地上に残された人々の「試練の時」が始まる。キリスト教に反発する勢力は国連を使って世界政府を樹立し、世界通貨と世界宗教を持った「グローバル・コミュニティ」が作られる。本部は「ニュー・バビロン」。

<11冊目『ハルマゲドン』>地球を牛耳るグローバル・コミュニティの支配下で地下組織「試練の軍隊」を作った者たちの目を通してハルマゲドンが描かれる。

<12冊目『グロリアス・アピアリング（荘厳な登場）』>天が割け、白馬にまたがったキリストが現れる。目は確信に満ちて燃え上がり、口から言葉が発せられるたびに、グローバル・コミュニティの帝王の軍隊の兵士らはばたばたと倒れ、体が割け、噴き出した血が池となった。

2004年12月の米誌「ニューズウィーク」の世論調査項目「次の千年の間にキリストは再臨すると思うか？」の問いに、52%が「はい」と回答。「あなたが生きている間の再臨は」に15%もが「はい」と答えている。

宗教右派とネオコンの結合

建国時からの国家理念が米同時テロの衝撃により呼び覚まされた、と指摘したクラーク氏に宗教右派とネオコンはなぜ結合したのかを聞いた。クラーク氏は「理論からくる奇妙な結合」と述べ、以下のように説明。

福音派のキリスト教信者の理論は、将来キリストは再臨し、いわゆるハルマゲドン、世界の終末における善と悪の決戦が起こる、とする。そしてその舞台となるのが聖なる地だ。キリストの再臨に先んじて、この聖なる地が維持されていることが重要で、そのためにはイスラエル国家が維持されていなければならない。従って、福音派のキリスト教信者を中心とする宗教右派は強くイスラエルを支持する。（一方、）ネオコンとして力を持つユダヤ系は、自らの宗教的信条としてハルマゲドン信じているわけではない。しかし、彼らにとって、影響力が大きい宗教右派と組めば政治力を増すことができるし、宗教右派のイスラエル支持は心強い限りだ」

宗教右派は、終末論から「キリストの再臨のためにイスラエルとエルサレムの存在が必要」と信じ、それをベースに国際政治上の主張を展開している。宗教右派とネオコンの結合は、主に宗教右派の終末論からもたらされたものだが、両者の世界認識には、もともと共通点があった。

しばしば「ネオコンの父」と称されるアービング・クリストル氏は小論「ネオコンの信念」の中で、外交政策に関して、ネオコンには信条とまではいかないが、歴史的経験から引き出された「態度 (attitude)」があると、3つの特徴をあげる。

- ① 愛国心は自然で健全な感情であり、公私ともに奨励されるべきである。
- ② 世界政府は、世界的な圧政につながる可能性のある恐ろしい理念である。究極的に世界政府という方向を目指す国際機関は深い疑念の目で見られるべきである。
- ③ 政治家は敵と味方を峻別する能力を持たねばならない。

アメリカの原理主義という仮説

原理主義、もともとは公立小中学校で進化論を教えることに反対し、聖書の記述を科学的、歴史的な事実として絶対視する人々の信条を意味する言葉だった。

これを一つの起点に、聖書にしがみつき科学を理解しない頑迷な人々というイメージを払拭し、極右の反ユダヤ、白人優越主義と袂を分かち、現代の広い層に受け入れられるよう発展してきたのが、宗教右派だ。彼らが一般に訴えたのが、ヨーロッパから新大陸に渡り、米国を建国したプロテスタントの清教徒の原理だった。連邦政府の干渉、規制を斥ける建国の原理原則をベースに、「世界政府」を忌み嫌いつつ、米国の使命としての自由の拡大に邁進する——という姿勢、情緒的志向は、米社会の底流に広がり、現代アメリカを彩るアメリカの原理主義を形作っている。

了